

こども  
子供のインターネットバイブル  
案内いたします

ひつじかいの  
しょうねん  
少年、ダビデ



ぶん  
文: Edward Hughes  
え  
絵: Lazarus

ほんやくしゃ  
翻訳者: Yuko Kajiki 監修者: Dan Ellrick  
しゅつばんしゃ  
出版社: Ruth Klassen

60話の第19話

[www.M1914.org](http://www.M1914.org)

Bible for Children, PO Box 3, Winnipeg, MB R3C 2G1 Canada

許可: 他人に売らない限り このお話のコピー、又はプリントは、許可されています。

日本語

Japanese

ずっとむかし、まだサウルがイスラエルの王さまだったときのお話です。  
ダビデという名の男の子がいました。ダビデは、  
7人のお兄さんを手伝ってお父さんのヒツジやウシの世話をしていました。

かれは、いちばん末っ子ですけれど、とてもつよく、勇気のある少年でした。  
それに、いつも神さまを愛しところから信じていました。その子は、  
ベツレヘムをいう町にすんでいましたよ。



いちど、こんなことがありました。ライオンがヒツジのむれをおそって、  
小さなヒツジをつかまえてしまいました。ライオンは、

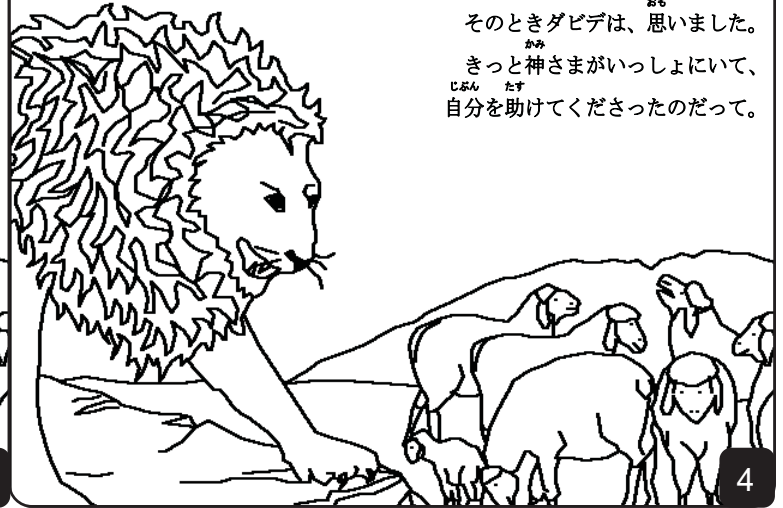
きっとヒツジを自分の晩ごはんにするつもりだったのでしょう。  
そのときダビデは、  
子どもだったのですが、  
ライオンにおそいかかりました。



3

そして、ライオンの口からそのヒツジをうばいかえたのです。  
次に、うなっているライオンのヒゲをつかんで殺してしまいました。

そのときダビデは、  
きっと神さまがいっしょにいて、  
自分を助けてくださったのだって。



4

そのころ、神さまのよげん者サムエルは、まだサウルのことで、悲しくてたまりません。なぜなら、サウルは、すっかり神さまからはなれてしまったのですから。「いったい、いつまでサウルのことでなげくつもりなのか。」

神さまは、こう言ってサムエルをしかりました。  
「サムエル、わたしはあなたをエッサイのところにかわそう……。それは、わたしがエッサイのむすここの1人を次の王としてかんがえているからだ。」



5

じつはね、エッサイという人は、ダビデのお父さんでした。サムエルは、  
神さまの言われることにしたが、もうひとりの王さまをさがしに行くことにしました。でも、もしサウル王がそのことを知ったら、

たいへんなことですね。  
サムエルをころすかもしれない。けれども、  
よげん者サムエルは、神さまにしたがいました。



6

サムエルがエッサイのいる町についたとき、エッサイは自分の7人のむすこたちにサムエルの前を歩かせました。ところが、サムエルはかれらを見て言いました。  
「エッサイ、主がえらばれたのは、このむすこたちじゃありません。」  
このとき、ダビデだけここにいませんでした。ダビデは、ちょうどヒツジのせわをしていたからです。そこで兄さんたちは、  
ダビデをへやの中につれてきましたよ。  
すると、主がすぐにサムエルにこたえられました。「立ちなさい。そしてかれに油をそそぎなさい。まさに、この人こそ主がえらばれたものである。」



7

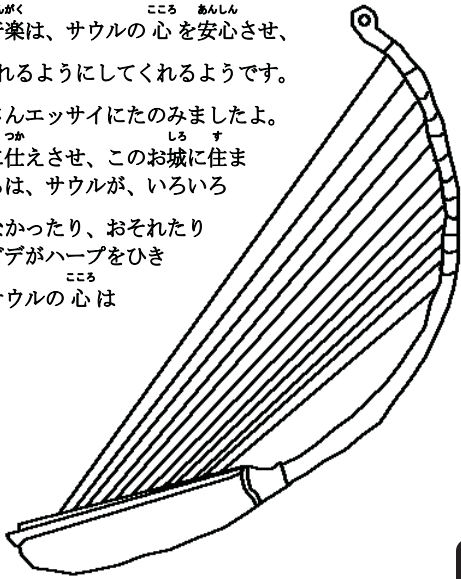
さて、そのころサウルのおしほは、いったいどうなっていたでしょう。じつは、  
主の霊がサウルからすっかりはなれてしまい、かれの心には安らぎやよろこびが

ありません。サウルのめし使いたちは、  
こう思いました。もし、  
サウルがうつくしい音楽を聞いたなら、  
かれの心はおちつき、  
やさしくなるかもしれないと。  
めし使いの1人が、  
ハーブをとでもじょうずにひくわかい男の人を知っていました。みなさん、  
その人はだれかわかりますか。そうなのです。  
その人はダビデですよ。



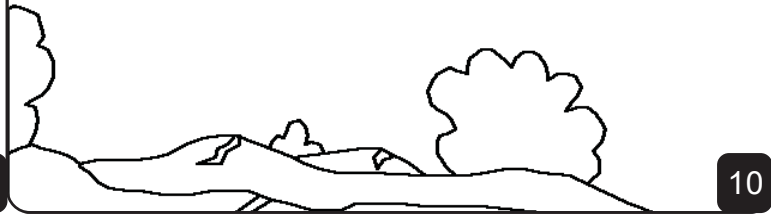
8

ダビデのおんがくのうつくしい音楽は、サウルの心をおんごんさせ、ものごとを正しく考えられるようにしてくれるようです。サウルは、ダビデのお父さんエッサイにたのみましたよ。「ぜひ、ダビデをわたしに仕えさせ、このお城に住まわせてくれ。」それから、サウルが、いろいろなことを心配して元気がなかったり、おそれたりするときは、いつでもダビデがハーブをひきました。それを聞くと、サウルのはおちつくのでした。



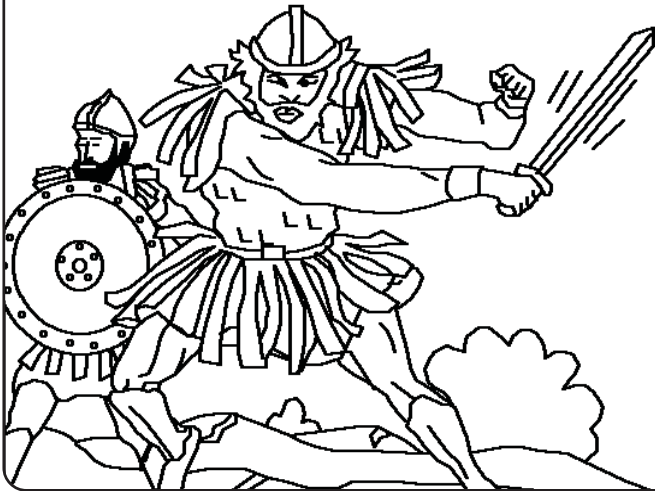
9

ダビデがお父さんのうちへかえってからのことです。サウルとペリシテ人のあいだに大きなたたかいははじまりました。ダビデの兄さんたちは、サウルの軍たいに入り、ペリシテ人とたたかいましたよ。エッサイは先とうに立ってたたかっているむすこたちが心配です。「ダビデ、兄さんたちに食べものをもって行って、どうしているか見てきておくれ。」エッサイは、こう言ってダビデを見さんのところに行かせました。



10

あれっ！ものすごくでかいペリシテ人がいますね。かれの名まえは、ゴリアテ。イスラエルの兵士たちをとともこわがらせていました。



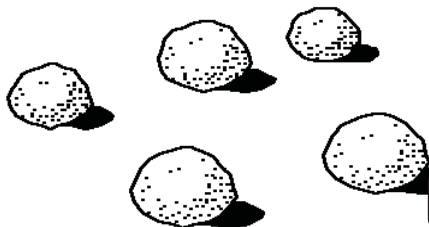
11

「やい、イスラエルの兵士ども！おまえたちの中から1人えらんでおれのところへつれてこい！」ゴリアテは、大きな声でさげびました。「もし、そいつがおれと戦って、おれをころしたなら、われわれペリシテ人はおまえたちイスラエルに仕えよう。だが、もしおれが勝ったなら、イスラエルは、ペリシテにつかえるのだ。わかったな！」ほんとうに大きくて強そうです。イスラエルの男たちは、「ああ、おそろ



12

ゴリアテのことを知ったダビデは、サウルに言いました。「王さま、イスラエルは、ゴリアテなどこわがることはないのです。あなたの召しつかいであるわたしが、ゴリアテのところへ行って、やっつけてまいりましょう。」そこで、サウルは、自分が戦うときのよろいや、かぶと、そして刀をダビデにわたして、それらを使うように言いました。でもね、ダビデはゴリアテとたたかうのにサウルのかぶとや、よろいや刀を使わなかったのですよ。じゃ、何を使ったのでしょうか。小川でひろったつるつるした5つの石と、石なげ器です。それらをもってゴリアテのところに行ったのです。



13

「ハッ、ハッ、ハッ、なんて小っぱけなやつだ。それに、よろいもかぶともつけないじゃないか。」ゴリアテは大声でわらいました。そして「おまえのからだをバラバラにして、空をとんでいる鳥や、野原をウロウロしているけものたちのえさにしてやろう。」



14

さあ、かかってこい！」と言っ<sup>い</sup>てどなりち<sup>い</sup>らしました。そこでダビデは、  
「わたしは、ただ主の名により、あなたのと<sup>い</sup>ころにや<sup>い</sup>ってきたのです。」

と答<sup>こた</sup>え、こ<sup>い</sup>う言<sup>い</sup>いました。「今日、  
主はあなたをわたしに任<sup>まか</sup>せられ、  
勝<sup>か</sup>たせてくださるでしょう・・・。  
このた<sup>い</sup>たかいは、  
主のものなのです。」



15

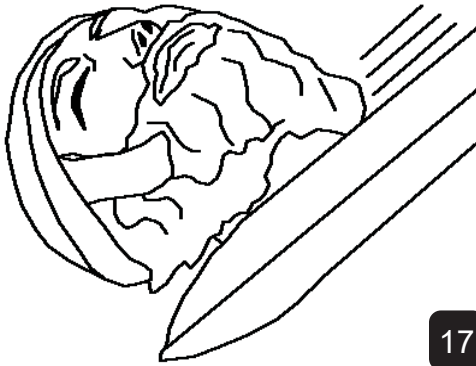
さあ、ダビデはゴリアテにむか<sup>むか</sup>ってま<sup>ま</sup>っすぐに進<sup>すす</sup>んでいきましたよ。ダビデ  
は、走りながら、石<sup>いし</sup>なげ器<sup>き</sup>から1つ<sup>いし</sup>の石<sup>いし</sup>を、ゴリアテにむか<sup>むか</sup>って投<sup>な</sup>げつけまし  
た。それは、ち<sup>ち</sup>ょうどゴリアテのひ

たいにめ<sup>め</sup>い中<sup>ちゆう</sup>したのです。  
ドシン！ものす<sup>おと</sup>ごい音<sup>ね</sup>です。  
あ<sup>あ</sup>っ、ゴリアテは地<sup>じ</sup>めんに  
ひ<sup>ひ</sup>っくりか<sup>か</sup>え<sup>え</sup>っていますよ。



16

ダビデは、すぐ<sup>おそ</sup>にゴリアテの大き<sup>おお</sup>い大き<sup>かたな</sup>い刀<sup>き</sup>をとりあげ、かれのあたまを切り  
おとしました。大き<sup>おお</sup>なゴリアテが死<sup>し</sup>んでしま<sup>ま</sup>ったのを見<sup>み</sup>たペリシテ人、  
みんなび<sup>い</sup>っくりです。「わあ、たすけてくれー。」と言<sup>い</sup>いながら、  
いちもくさん<sup>お</sup>んにに<sup>お</sup>げてい<sup>い</sup>きました。



17

そのとき、サウル王<sup>おう</sup>は、ゴリアテをや<sup>ひ</sup>つつけた人<sup>ま</sup>が、前<sup>ま</sup>にハープ<sup>じぶん</sup>をひいて自分<sup>じぶん</sup>  
をな<sup>な</sup>ぐさめてくれたダビデとは、ま<sup>ま</sup>ったく気<sup>き</sup>づきません<sup>し</sup>でした。あとでそのこと<sup>こと</sup>が  
わ<sup>わ</sup>かり、き<sup>き</sup>つとど<sup>ど</sup>ろい<sup>い</sup>たこと<sup>こと</sup>でしょうね。それ<sup>それ</sup>から、

サウルはダビデを自分<sup>じぶん</sup>の軍<sup>ぐん</sup>たいの長<sup>ちゆう</sup>として、  
は<sup>は</sup>たら<sup>ら</sup>いてもら<sup>ら</sup>うこと<sup>こと</sup>に<sup>に</sup>しま<sup>ま</sup>した。ところが、  
それ<sup>それ</sup>からサウルとダビデの仲<sup>な</sup>がだ<sup>だ</sup>ん<sup>だ</sup>  
ん悪<sup>わる</sup>くな<sup>な</sup>って<sup>て</sup>い<sup>い</sup>くのです。



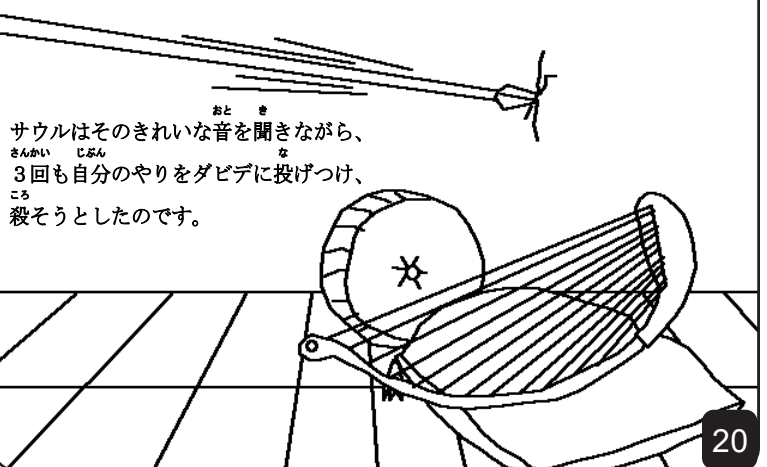
18

ダビデ<sup>た</sup>が戦<sup>たたか</sup>いで勝<sup>か</sup>つた<sup>た</sup>びに、人々<sup>ひとびと</sup>はダビデをほ<sup>ほ</sup>めたた<sup>た</sup>えるよ<sup>よ</sup>うにな<sup>な</sup>ったから<sup>か</sup>らで  
す。サウルは、ダビデにし<sup>い</sup>っとし、こ<sup>こ</sup>う言<sup>い</sup>ってに<sup>に</sup>くし<sup>し</sup>みは<sup>は</sup>じ<sup>じ</sup>めた<sup>た</sup>のです。「いま  
やダビデは何<sup>なん</sup>でもも<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>ている<sup>て</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>じ<sup>じ</sup>ゃ<sup>あ</sup>ない<sup>い</sup>か。わたし<sup>わたし</sup>の  
王<sup>おう</sup>国<sup>こく</sup>のほ<sup>ほ</sup>かは何<sup>なん</sup>でも・・・」サウルは、  
ダビデ<sup>しん</sup>を信<sup>しん</sup>じ<sup>じ</sup>ない<sup>い</sup>で、い<sup>い</sup>つも<sup>も</sup>う<sup>う</sup>た<sup>た</sup>が<sup>が</sup>い<sup>い</sup>と  
に<sup>に</sup>くし<sup>し</sup>み<sup>み</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>見<sup>み</sup>つ<sup>つ</sup>め<sup>め</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>う  
な<sup>な</sup>りました。



19

また<sup>また</sup>しても、サウル<sup>こころ</sup>の心<sup>こころ</sup>には<sup>は</sup>やす<sup>やす</sup>ら<sup>ら</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>が<sup>が</sup>な<sup>な</sup>く<sup>く</sup>な<sup>な</sup>って<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>。  
そ<sup>そ</sup>こ<sup>こ</sup>で<sup>で</sup>ダビデは、サウル<sup>こころ</sup>の心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>な<sup>な</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>さ<sup>さ</sup>め<sup>め</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>と、  
う<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>しい<sup>い</sup>音<sup>おんがく</sup>楽<sup>き</sup>を<sup>を</sup>聞<sup>き</sup>か<sup>か</sup>せ<sup>せ</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>よ。と<sup>と</sup>ころ<sup>ころ</sup>が、「あ<sup>あ</sup>っ、あ<sup>あ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>ない！」

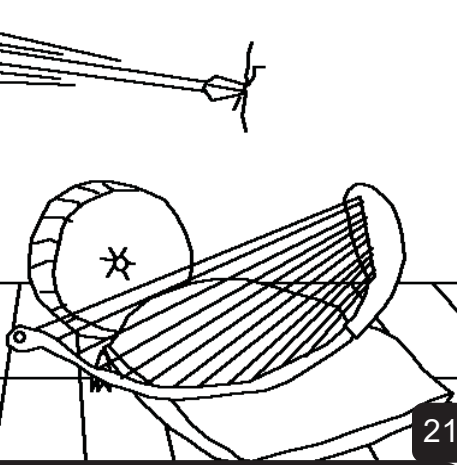


サウルはそのきれいな音<sup>おと</sup>を<sup>き</sup>聞き<sup>き</sup>ながら、  
3回<sup>さんかい</sup>も自分<sup>じぶん</sup>のやり<sup>や</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>ダビデ<sup>に</sup>に<sup>に</sup>投<sup>な</sup>げ<sup>げ</sup>つけ<sup>け</sup>、  
殺<sup>ころ</sup>そう<sup>そう</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>のです。

20

でも、そのたびにダビデは、そのやりからうまくにげることができました。サウルは、ますますダビデがおそろしくなりましたよ。どうしてって、主はサウルからは、はなれてしまったけれど、ダビデとは、

いつもいっしょにいて、  
まも  
守っていられることがよ  
くわかったからです。



21

ところが、サウルのむすこヨナタンは、ダビデが大好きでまるでほんとうの兄さんのように思っていました。あるときヨナタンは、ダビデにこう言いました。

「気をつけて！ぼくの父さんは、あなたを殺そうとさがしまわつています。」そこで、ダビデは急いでにげることになりました。

じつは、ダビデのおくさんは、かれのベッドの中に人形を入れておいたのです。そして、ま夜中にダビデをまどからつり下ろしにがしてくれました。

さて、サウルの使いがきて、ダビデをつかまえて殺そうとしたのですが・・・。

ダビデはもうベッドに  
いませんでしたよ。



22

ダビデはサウルからのがれて、とおいとおい所に行かなくてはなりませんでした。ダビデがにげる前、かれとヨナタンは、おたがいに何ともしっかりとやくそくしました。そのやくそくっていうのはね、「これからも2人は、いつも助け合っていこう！」というものでした。



23

かなしいことに、この2人はそれからすぐに「さようなら」を言わなければなりませんでした。ダビデは、これから生きていくところをさがしに出発したからです。もうサウルの兵士に見つからないところをさがしにね。



24

ひつじかいの少年、ダビデ

神さまの御ことば、聖書に記されているおはなしです。

サムエル記上 16 章 -20 章

あなたの御ことばが開かれると、光が与えられます。

詩篇 119:130

神さまは、私たちがよくないことをしたことを、しっていらっやいます。神さまは、それを罪とよばれています。罪のむくい、死です。

神さまは、私たちをととも愛されたので、み子イエスさまをこの世におくってくださいました。そして、イエスさまが十字架で亡くなられることによって、私たちの罪をとってくださいました。イエスさまは、よみがえられ天国へもどられましたね！ですから、今、神さまはあなたの罪をゆるしてくださいます。

もし、あなたがあなたの罪からはなれたいなら、神さまにこう言ってください。愛する神さま、私は、イエスさまが私のために亡くなってくださり、よみがえって、今また生きていらっやることを信じます。どうか、私のこころの中に入り、罪をゆるしてください。それで、私は今、あたらしい命をいただくことができます。そして、いつまでも、あなたといっしょにいらることができると、あなたの子として、生きることができると、たすけてください。アーメン

ヨハネによる福音書 3 : 16

まいにち、聖書をよみ、神さまと、おはなししましょう！